

攻撃は人生の華、守備は労働

松本光弘

筑波大学名誉教授

平成17年2月23日水曜日3時限、大学会館ホールにおいて体育専門学群サッカー領域の先生方の計らいで定年退職前の最終講義を行う運びとなりました。私自身は昨秋9月14日の第一サッカー場のモンドターフ敷設に伴う記念フェスティバルで役目は終了と考えていました。ところが最終講義を行うということでその内容について思案した結果、これまで私が授業はいうまでもありませんが教育の中心となってきた課外活動の指導(蹴球部)を通じて折に触れ接してきた様々な事柄について話させてもらうこととしました。

その講義が終了してまもなく筑波フォーラム編集委員の真田久先生から講義の内容について執筆を依頼されました。そこでこの演題について出身高校のサッカー部の機関紙に掲載したものでありますが若干加筆訂正して原稿の提出とさせて頂くことにしました。

人間はいろいろな面で大変特殊な動物だと思います。その一つにその動物が種を残せる状態(子孫を残せる状態即ち生殖活動が可能になる時期)になる事がその動物の完成期と考えると、この状態になるまでの期間が他の動物と比較して人間は大変長いということです。例えば犬などは誕生から3年もすると交尾して子犬を誕生させます。これが植物になるともっと短期間で、私達の主食である米などは、種子初を苗代に早春蒔くと初秋には稲穂が実り、収穫することができます。生殖活動までは行かなくても私達の身近な動物を見ているとその違いは明白です。例えば、馬の誕生を見ていると、子馬が誕生した数分後には彼は細い華奢な四脚をフラフラさせながらも自分の脚で立ち、歩み、数分間後には周囲を跳びはねるまでになります。また、野鳥の卵が孵ってひな鳥が誕生すると数週間後には親鳥から離れ、巣立っていきます。これに比べ人

間は誕生から四這、そして2本の脚で立つてヨチヨチ歩き、そして自由に動き回れるようになるまでに2~4年かかります。そして動作は自由自在に動き回れるようになりながらも、その後、小学校、中学校、高等学校と両親などの保護のもとに成長し、大学を卒業してやっと身体的にも精神的にも自立し、社会に巣立っていきます。この間約22年、何の生産的な行為もせず、ただひたすら実社会へ出て自活（自立）するための準備をするといっても過言ではないでしょう。それではその期間の彼等の生きる糧やほしい物を手にいれる金銭はどうしているかといえば親からの援助であり、仕送りです。特に高校生期、大学生期は冒頭記した人間の完成期（種が残せる状態）にさしかかりながらも、未だ自分で自分の生活の糧を得ない状態に居るということです。これは現在の日本の社会構造がそのようになっているから可能なことであって、フィリピンの田舎に行けば小学生の頃から一家を支えるために懸命に働いている子供は数えきれない程居ます。インドネシア、マレーシア、イラン、ブラジルなどでも同じような光景を見ることができます。このようなことを思いながら、サッカーというスポーツを眺めるとき、サッカーは他の動物の成長ではなく、人間の成長に良く似ているように思えます。それは、ボールを扱うという

技術を習得するために非常に長い時間がかかること、技術の習得とは攻撃の手段を獲得するということです。攻撃は明るく、楽しく、希望に満ちた世界です。幼稚園、小学校、中学校位まではこの世界の、人間としての側面をおおいに伸ばし、人生の楽しさ、明るさ、希望、夢を育む時期です。この時代は自由で、活発で、束縛や規制をできる限り受けない、自由な発想、何の先入観も持たない創造性、奇抜なアイデアなどが生みだされなければならない時期だと思います。この時期に変な束縛をし、いらぬ先入観を入れられては自由奔放な攻撃のアイデアは生まれて来ません。

しかし、この時期を過ぎて、一人前の人間となりつつある高校生（厳密にはトップの競技者育成では小学校高学年あたりから徐々に）になったら、自分の生活の糧といっても過言でないボール（サッカーのゲームで唯一のもの）を自分で獲得する術と努力を身に付けなければなりません。それまでの“子どもの時期のサッカー”はどこからかボールが自分達のチームに来ることを前提として攻撃を考えても許される（親の保護で生活する）のです。このボールを獲得する行為、それよりも重要な自陣のゴールを守るという行為、即ち守備、これは大人のサッカーの必要絶対条件です。

高校生のサッカーが子供から大人のサッ

カーに変わる転換期であるならば、この守備に対する考え方をこの時期に徹底させることが不可欠です。この守備という障害をつきつけられた時、攻撃はそれを乗り越えるためのアイデアと術を工夫し、練習し、獲得していくものです。高いパフォーマンスを示すチームには高い守備能力があります。その守備能力を乗り越えようとする攻撃の工夫と日々のためめ練習があるので。そして、この攻撃能力の向上が次に守備者に対し、大きな課題となって守備能力の向上へとプレーヤーを駆り立てるのです。このような環境ができたチームが他のチームと競い合った時初めて勝利という自分達の努力の証を得ることができるのだと信じています。しかし、ただ単に高い守備能力と表現しましたが、この能力の獲得はそう短期間に簡単にできるものではありません。トレーニング、栄養、休養、そして知的学習、まさしく自分の生活を律してはじめて獲得できるものです。これはまさしく先にも述べましたが生活における労働の側面だと思っています。自分の都合や気分や身勝手で行うものでなく、束縛や規制や約束事の中で責任と信頼に裏付けられた大人の世界のことなのです。あまりマイナス的要素は言いたくありませんが、プレーヤーの中にはこのことに気付いていない身体とプライドだけが大人のプレーヤーを見かけるときがしば

しばあります。

過日の母校（高校）のグラウンドでほんのわずかな時間、後輩達とサッカーを共にする時間があり、攻撃面のテーマを中心に練習しながらも、上述した守備能力のあまりの低さに現在の日本の高校サッカー（大人に差し掛かる時期の人）の問題点を垣間見たような気がしました。

最後に久しぶりに母校のグラウンドに立ち、後輩に接し、部員（サッカーを愛する人）の多さとサッカーに対する真摯な態度に感激しながら、40数年前の高校からサッカーを始めた下手くそな自分を何人もグラウンドの上で発見し、現在の立場にある自分の幸せに感謝すると共に今後への意欲が湧きたったことも付記しておきます。

（まつもと みつひろ/スポーツコーチ学）